

北朝鮮における言語政策

——「第1次・第2次金日成教示」の分析——

文 嬉 眞

はじめに

朝鮮半島における南北両域間の言語生活の現状は、体制と理念などによる言語観の相違や言語政策面での差異によって、言語の異質化が深化しているのが実情である。目下、その言語上の異質化が加速化しつつある傾向の要因は、南北両国が各々独自の言語政策と言語規範を創り出した点に存在している。特に、北朝鮮における特殊の言語政策の実施が現況のような言語の異質化の現象を招く一つの重大な原因ともなっている。さらに、南北両域間の言語政策の根本的な相違点としては、韓国では一般民衆の使用言語の変化に伴って政府の言語政策が修正されることに対して、北朝鮮では先ず言語政策を策定した後に人民に対して言葉の修正を求める方法をとっていることが取り上げられる。すなわち、南北両域間では全く異なる言語政策が採られている。

北朝鮮における上からの国家主導的な言語政策は、特に1964年と1966年の二度にわたって示された金日成教示⁽³⁾がその根幹をなしている。それは、絶対的統治者〔金日成〕である政治指導者の一言によって、国家の言語政策が左右される好例である。そのことは、国家の言語政策に関する一定の方向性を決定付け、急激な言語の修正を余儀なくされる結

果を招いた。さらにそれが、南北間の言語の異質化を益々加速化させる主要な契機となると同時に、それを決定付ける主因にもなっていったのである。そして、金日成の死亡後は彼の後継者である金正日が、その言語政策の多くを継承しつつ、それを主導したといわれている。また、このような北朝鮮の言語体制は「金日成が創始し、金正日がその主体主義を言語に適用・発展させた⁽⁴⁾」という点で、すなわち一政治家による言語政策の樹立・適用と直系の政治家によるその政策の継承・発展という点で注目に値する。

北朝鮮における言語政策の変遷過程に関する時期的な区分問題については多くの学者によって、様々な視点に立って分類されている。まずそれについて整理して見ると、概ね以下のようなようになる。キン・ミンス⁽⁵⁾は、第1期(1945-1954)を「統一案時代」、第2期(1954-1966)を「綴字法時代」、第3期(1966-現在)を「規範集時代」として3期に分類して区分している。この分類は、北朝鮮での二度にわたる綴字の改革に重点が置かれ、それを境界線にした分類法である。

コ・ヨンクン⁽⁶⁾は、第1期(1945-1953)を「ハングル正書法統一案の準用」期、第2期(1954-1966)を「朝鮮語綴字法の共存」期、第3期(1966-1976)を「文化語運動の展開」期、第4期(1976-現在)を「規範集に依拠した文化語運動の定着」期と捉えている。すなわち彼は、北朝鮮における言語政策の変遷過程については概ね4期に区分して分類している。彼の区分する際の特徴は、正書法、標準語などの言語規範の変化を中心に据えた分類法となっている。

ナム・ソンウ⁽⁷⁾の場合、「朝鮮語時代」(1945-1965)と「文化語時代」(1966-現在)の2期のみに区分し、南北言語の異質化が深化されて行く契機は金日成の主導による「文化語」の登場にあるという視点からの分類法をとっている。そしてナム・ソンウは、上記のコ・ヨンクンによる3期と4期に関わる時代区分に対しては、綴字法の変遷によって正書法におい

て多少の差が示され、語彙の整理運動によって語彙にも若干の差が見られるが、その綴字法の規定などの幾つかの差異を用いての時代区分は便宜的な発想である、と批判する。北朝鮮における「文化語」の登場が、南北両国における言語の異質化現象の顕著化に大きな影響を与えたことは確かである。筆者は、この分類法に概ね同意するものの、4回の綴字法の改革を全く考慮しない点には疑問を持ちつつも、この分類法を援用して本稿を進めることにする。

さて、1966年の金日成による「第2次教示」の発表後、『朝鮮語文(조선어문)』や『文化語学習(문화어학습)』が刊行され、「文化語運動⁽⁸⁾」が活発に行われた。そして1968年の『現代朝鮮語(マル)辞典(현대조선말사전)』には、「文化語」の基本的な単語約5万個の見出し語が選定されて掲載されている。同辞典は、辞典であるにも拘らず、漢字を全く使用していない点で大きな特徴をもっている。また1980年まで平安道(평안도)、咸鏡道(함경도)、江原道(강원도)の方言の中から3100個余りを選別し、それを「文化語」として使用することが含まれている。このように、北朝鮮では言語学者によって「文化語運動」の一環として方言や新しい言葉として発掘されたものは、『朝鮮語(マル)大辞典(조선말대사전)』(1992年)に新しい語彙として追加されている。

以上のように、両国の言語の異質化の主な原因が北朝鮮に求められるとすれば、概ね以下のようなものによる。それは、まず絶対的な統治者であった金日成による二度にわたる言語に関わる教示である。次に挙げられる原因は、その二回の教示に基づいて行われた人為的な言語政策であったと考えられる。そこで本稿では、北朝鮮の言語政策は金日成の1964年と1966年の二度にわたる教示がその根幹をなし、それが後の言語の異質化の現象を引き起こす一因にもなっている、という仮説を立てている。その仮説に基づき、本稿は上の二つの教示の内容を、言語学的な側面と政治的な側面、すなわち言語と政治(指導者)との両者の政策

形成上の影響関係に関する実証分析を、その狙いとして⁽⁹⁾いる。

1. 「第1次金日成教示」の内容と分析

「第1次金日成教示」は1964年1月3日に、金日成と言語学者との談話の中で発表された「朝鮮語を発展させるためのいくつかの問題」を題目にして、1968年『文化語学習』2号と『金日成著作選集』4巻に収録されたものである。本章では、その教示の発表順に従って原文の内容を整理し、それについて⁽¹⁰⁾の分析を試みる。

(1) 文字改革の問題

金日成は、以前の金料奉（⁽¹¹⁾김두봉）一派によって提起された文字改革に対して言及し、それに関して反対意見を示した。その際に、まずある人（金料奉）は言語問題を民族問題と結び付けていないと批判している。さらに言語は民族を特徴付ける共通性の中で最も重要なものの一つであるが故に、文字改革を行うことができないと主張している。そして仮に我々が彼らの主張する通りに文字改革を行ったとしても、南北両人民がお互いに違う文字を使うことになれば、例えば、手紙を書いて送ってもその内容が分らず、新聞や雑誌をはじめとする出版物もお互いに理解できなくなる。これは朝鮮人民の民族的な共通性をなくし、結局は民族を引き離す大変な結果をもたらすことになるために、金料奉の文字改革に対して金日成は反対を表明したということである。

第二に、直ちに文字改革を行うことが科学と文化の発展に大きな支障を与えるために、それには反対であると金日成は主張した。

第三に、彼ら（金料奉一派）は文字発展の国際的な方向性をも考慮しなかった。だが北朝鮮は、共産主義国であるために、己の言葉と文字を

発展させるところから世界人民の言語発展における共通的な方向を考慮しなければならないと主張した。全世界が全て共産主義（国）になるには、恐らく、相当な歳月を要する。したがって、ある時期までは民族的なものを活かさなければならないとしている。その上で言えることは、民族的なものだけを考え、世界共通のものを考えないことも間違いであり、その反対に世界共通のものだけを考え、民族的なものを考えないことも間違いであるとも金日成は主張している。

そして文字改革は南北が統一を果たし、次いで北朝鮮の科学技術が世界的な水準に上った後に、それを問題にすべきであるとしている。この教示の中で、金日成は文字改革それ自体に対して反対しているのではなく、ただ時期の問題が重要であることを示している。さらに、我々の文字にはある程度の欠陥があるだけに、これからそれを正しく直す研究を行うことが必要であるとしている。例えば、我が文字は四角い文字であるため、これを変えることによって見易くなり、打ち込みにおいても文字の技術化（機械化）が速くなることも主張している。

また、これからは文字の改革を行うことになっても、民族的な特性を生かしながら世界共通のものに簡単に接近できるようにしなければならないとし、その文字改革の方向性をも示している。しかしながら、この教示には文字改革問題に対しては反対であるというのみであって、言語学的または科学的な根拠が示されずに終わっている。またその時期的な問題⁽¹²⁾に関しても北朝鮮の政治形態からみると漠然とした抽象的なものであると言わざるを得ない。上述のような金日成の文字改革に対する方向性の提示は、その後の文字改革だけでなく、言語政策や言語発展に関連する全ての言語問題における指針となっている。

(2) 朝鮮語の優秀性

金日成は、朝鮮語の優秀性についても言及した後に、三つの観点から

以下のように主張している。それは第一に、朝鮮人民は昔から固有言語である朝鮮語をもっているために立派な民族文化が創造でき、美しい風習と伝統を守り続けることができた。だから、朝鮮語には民族的な自尊心と民族の団結力が強くあらわれていると主張した。

第二に、今日も我々の言語と文字は我が国の経済と文化、科学と技術の発展において、また社会主義建設の全ての分野において力強い武器になっているとする新しい言語観を示した。

第三に、朝鮮語は流暢でかつ高低と長短があり、抑揚も自然な言語であって、その聞こえの面から見てもとても美しい言語である。また朝鮮語は、その表現が豊富なために複雑な思想と繊細な感情を上手く表現するができ、人々を奮い立たせることも泣かせることも笑わせることもできる言語であると述べる。そして、朝鮮語は礼儀作法を明確に表すことができるために、人々の共産主義の道徳教養を高めるにも非常に良い言語であるとしている。さらに、朝鮮語は発音が非常に豊富であるために、我々の言葉と文字で東西のあらゆる国の言葉の発音を自由自在に表現できると主張した。

そこには、金日成が自国の言語中心的な言語観を強調しているにも拘わらず、その根拠をほとんど示さずに、ただ抽象的な主張を繰り返すに留まっている。また金日成による「第1次教示」には言語問題が政治体制と結び付けられて論じられる一方で、朝鮮語の優秀性の面を非常に強調する自国の言語ナショナリズム的な要素が強く露呈されている。

(3) 漢字語の問題

朝鮮語の言語生活上における漢字語の活用問題について、金日成は、従来のような漢字語の使用に関する考え方や態度を改めるべきであるとし、以下のように主張した。

第一に、新たにつくられる言葉は朝鮮語の語根によってつくられるこ

とを原則とするとし、その単語体系を固有語と漢字語の二つの言語体系にして、複雑にする必要はないとした。その単語体系は我々の固有語を根拠にして一つの体系としてつくられるべきであると述べた。その作業のために、まず固有語の語根がどれぐらいであって、漢字語根がどれぐらい存在するのかを調査した後に、その統計を出してみる必要があると主張した。そしてその統計をとるための準備作業を進めるように国語学者に指示した。このような金日成の直接的な指示によって、北朝鮮における語彙に対する整理事業が本格的に始まることになる。

そして、新たな言葉をつくる際に、朝鮮語の語根だけでつくることができなければ、別問題となるが、そうでなければ固有語の語根でもって朝鮮語を発展させなければならないと主張した。

例えば、《釘 (땀)》を用いて《ねじ釘 (나사땀)》、《ぜんまい状の掛け釘 (타래땀)》、《木釘 (나무땀)》のような新しい単語で表現することができるといった主張である。また、最近出現する単語を見ると、《豚肉 (돈육)》、《仔豚 (자돈)》、《母豚 (모돈)》、《苗木 (묘목)》、《苗圃田 (묘포전)》のような若者がよくわからない単語が多いため、固有語に直すべきであるとした。さらに《桑田 (상전)》について、若者は傀儡たち〔韓国人〕が米国の奴を自分たちの主人として仕えるという罵るときに使う《上典 (상전)》という言葉と間違ふときがある点に言及し、以下のような漢字語を固有語に直すべきであるという提示を出した。

- 《桑葉 (상엽)》→《桑の葉 (뽕잎)》
- 《桑田 (상전)》→《桑畑 (뽕밭)》
- 《桑木 (상목)》→《桑の木 (뽕나무)》
- 《養蚕 (양잠)》→《蚕を飼う (누에치기)》
- 《蚕絹 (잠견)》→《絹 (명주)》
- 《蚕糸 (잠사)》→《絹糸 (명주실)》
- 《豚舎 (돈사)》→《豚小屋 (돼지우리)》

《十九歲 (십구세)》→《十九歲 (열아홉살)》

《煙草 (연초)》→《タバコ (담배)》

《石橋 (석교)》→《石の橋 (돌다리)》など

第二に、既に完全に我が国の言葉として定着してしまったような漢字語まで棄てる必要はないと主張した。その例としては、《部屋 (방)》、《学校 (학교)》、《科学技術 (과학기술)》、《三角形 (삼각형)》、《業 (업)》などの言葉が挙げられている。

第三に、特に科学論文や政治報告では漢字語が比較的によく使われるためにそのまま認めるべきであると主張した。例えば、政治用語である《連合会 (연합회)》、《分科会 (분과회)》などを取り上げ、その類の漢字語は従来そのまま使用することを認めている。

第四に、特に中国式の漢字語を使用する場合、中国語の発音だけを朝鮮語の発音にそのまま置き換えて使うことはよくないとし、中国式の漢字語は次のように直すべきであると主張した。

《工作報告 (공작보고)》→《事業報告 (사업보고)》

《火車站 (화차참)》→《停留場 (정거장)》

《工人階級 (공인계급)》→《労働階級 (노동계급)》など

第五に、既に語根が漢字になってしまったものは必ずしも作り直す必要はないとした。その場合、間違いというものは、朝鮮語にも多いものを上手に探し出さずに、わざわざ漢字語をつかって使うことであるとしている。したがって、必ず使うべき漢字語であれば、ある程度限定させておき、それ以上新たに つかって使わないようにしなければならないと主張した。すなわち、一言で言えば、同じ意味をもつ単語として固有語と漢字語の二種類がある場合にはできるだけ固有語を使い、ある程度の漢字語を使うとしても既に朝鮮語として定着したものだけを使うこととする。その際に、その範囲を制限しながら新しい漢字語をつくり出さないようにし、あくまでも我々の固有な語根を基本にして朝鮮語をより豊

富に発展させなければならぬと主張した。

そこには、語根の場合には、朝鮮語を中心にすべきであると主張する一方で、場合によっては漢字語の使用や既に朝鮮語と化してしまった言葉については従来のままの使用を認める点で実用的な面をも示している。また漢字語の際と同様に、外来語の場合でも原則的には朝鮮語に直すべきであるとしつつも、科学技術用語の場合には必ずしもその限りでないとし、例外を容認している点で、実用主義的な現況をも認めている。さらに「第三に」における記述から見れば、当時の学術論文や政治用語には現在とは違って漢字語が相当使われていることが窺われる。

(4) 外来語の整理問題

外来語の整理に関する見解では、第一に、外来語はできるだけ固有語に直して使うようにしなければならないと主張した。また、吳琪燮（오기섭）の事例を取り上げ、《イデオロギヤ（이데올로기야）》、《ヘゲモニヤ（헤게모니아）》などの例から朝鮮語をロシア語化しようとする風潮を批判している。

《エクザメン（에크자멘）》→《試験（시험）》

《クラス（클라스）》→《学級（학급）》

《プルラン（빨란）》→《計画（계획）》

《テンポ（템포）》→《速度（속도）》

《ウワギ（우와기）》→《洋服上着（양복저고리）》

《ズボン（즈봉）》→《洋服バジ（양복바지）》など

そして、林檎の名前にも《アサヒ（아사히）》、《イワイ（이와이）》の代わりにその林檎の生産地である《北青（북청）》、《黄州（황주）》という産地の名前に置き換えて使うべきであると述べた。

第二に、外来語を全部なくすことはできないため、外来語をある程度使うことは避けられず、いくらかは受け入れることを主張した。特に、

科学技術用語には少なからぬ外来語が入っているので、例えば、《トラクター (트락터)》、《旋盤 (선반)》、《タニング盤 (타닝반)》などはそのまま使用した方が良く、今後も科学技術用語を直すときには専門家と協議しなければならないと言及した。

第三に、外国の固有名詞は日本語や中国語を用いての発音を行わずに、その国の発音通りに真似した方が良く、国家名もその国の言葉で発音した方が良くと主張した。以上のように、「第1次金日成教示」では前述の漢字語に関する姿勢とは違って、外来語の問題に関しては相当に緩やかな基準を示しているのが特徴的である。

(5) 数字表記

数字表記に関して、「第1次金日成教示」では我が国の数字体系に従わなければならないため、西洋人のような千単位ではなく、万単位で使わなければならないと述べられている。勿論、アラビア数字は下から三桁ずつ、点をつけて上がることが世界共通のものであるために、そのまま使うことが良くと言及した。「第1次金日成教示」では数字の表記問題についての特別な注文を付けずに、ごく一般的な言及をするに留まっている。

(6) 漢字問題

漢字は朝鮮語の中で使う必要がないと主張した上で、その理由として、漢字をつくり出した中国人自身も習い難く、かつ使い難いために、これから棄てようとしている点を挙げている。そのような状況の中で、なぜ我々だけがそれを使おうとするのかを問い、金日成は漢字不用論を主張した。その一方で、漢字問題は我が国の統一問題と関連して考えなければならないとも主張している。そのために、我々が漢字を完全に棄てることになれば、南朝鮮で出版される新聞や雑誌などを読めなくなるので、

我々は一定期間まで漢字を学ぶ必要性が生じる。その場合、その漢字を一つの外国の文字として使うようにしなければならない状況が生まれると主張した。

勿論、そうだとと言っても、新聞や出版物に漢字を使用しようということではなく、北朝鮮の全ての出版物は朝鮮の文字で書かなければならないと主張した。すなわち、ここでは漢字の使用を全く否認する方向へと議論を進めつつも、南北統一という政治問題と絡ませて言語問題を取り上げている点で、特徴的である。だが、教示の方向性としては結論的に言えば、あくまでも漢字不要論を強調する内容となっている。

(7) 単語形態の表示問題

単語は、分かち書きをすべきであるとし、現在の朝鮮語の文章では単語が一つ一つ固定された形態を成しておらず、文字を一列に羅列しているかのように見え、そのために漢文やヨーロッパの文字に比べて、ちょっと見ただけでは簡単には目に入ってこないと主張した。すなわち、西洋の文字のように横に解いて書くと単語形態が固定されるのだが、朝鮮語は単語の形態が固定されていないために綴字法も難しいと述べている。しかし、単語形態を固定させるという問題は、南北が統一を成し遂げた後に解決しなければならない問題であるとし、それに対しては、今から研究しておかなければならないとした。

今のような四角い文字を用いても分かち書きや句読点などのようなもので上手く調節すれば、このような問題はある程度解決できるはずであると主張している。そして分かち書きをするものと分かち書きをしないものを上手く調節すれば、朝鮮語の文章も遥かに見易くなり、タイプライターを打つときも必ず一つの単語は分かち書きをしないようにして、単語と単語の間には一定の間隔を置くようにしなければならないと金日成は主張した。

上述のように「第1次金日成教示」では、言語問題を常に南北統一後を念頭に置く政治問題とセットにして考える傾向がみられる点で特徴的である。さらに分かち書きの問題については、タイプライターの使用時のテクニカルな分野をも考慮している点で注目に値する。

(8) 標準語の設定問題

朝鮮の言語学の発展と関連して、金日成は如何なる外国語もその手本にはいけないとし、英語や日本語が多く混在しているソウルの言葉を標準にすることもできないと主張した。北朝鮮の場合、あくまでも固有語を基本にし、社会主義を建設している北朝鮮が中心になり、朝鮮語を発展させなければならないと主張した。そのような観点からこの標準語問題は、後の金日成の主導による「文化語」という新しい標準語の概念としての言葉を台頭させることになる。

そこには、自国の言語を重視する観点から韓国語に対する批判へと進んでいる点が多くみられる。その結果として、1966年の「第2次金日成教示」をきっかけとして「文化語」が生まれた点で、言語学的には評価できる部分も存在するとも考えられる。その一方で、金日成が常に南北統一という政治問題を意識している観点からすれば、「文化語」の出現は政治的な体制競争と絡ませた結果として、今一つの標準語の誕生による言語の異質化現象を招くことをも意味している。

(9) 語彙の整理問題

第一に、現段階では語彙を中心とする言葉を整理することが最も重要であるとしている。さらに言葉を整理した後に、文字形態や綴字法も見直さなければならないと言及している。そして語彙整理の問題は、言語問題の中で重要かつ至急な問題であると指摘した。

第二に、固有語と朝鮮語の形態になってしまった漢字語に関して調査

するよう指示している。その際に、漢字語の中でも使い続けるべき漢字語と棄てるべきである漢字語を調査・分類し、後者は辞書からも大胆に削除すべきであるとしている。そしてまた、使用しない漢字語は漢語辞典にだけ載せる一方で、『朝鮮マル（말）辞典』には最初から漢字語を載せないほうが良いと主張した。また、科学院で編纂・刊行した『朝鮮マル（말）辞典』には漢字語があまりにも多く載っているため、それはまるで中国の『玉篇』のようであると批判した。

第三に、語文学研究所は語彙を整理し、研究所自らが新語をつくり出すことを統制する機関になるべきであると指摘した。つまり、同研究所以外の他の機関では語彙の整理や新語などをつくり出せないようにし、公文書や出版物には正確な朝鮮語を使用するよう強力に要請した。

上述のように、大々的な語彙の整理事業を行っていることは大いに評価できるものの、金日成が言語問題を常に南北が統一を成し遂げた後を見据えての政治問題として意識しているものと絡んだ南北間の言語の異質現象を改善するための共同研究の部分に全く触れずに終わっている点で問題を孕んでいる。

(10) 言語生活の気風確立と朝鮮語の教育問題

「第1次金日成教示」では北朝鮮の人々が思想的に動員され、社会的な運動を起こし、朝鮮語を正しく使う気風を確立しなければならないと主張した。すなわち「第1次教示」の中で金日成は難しい漢字語を使わず、大衆が分り易い言葉を使用すべきであることを国家的な次元で広く宣伝しなければならないと指摘した。北朝鮮のような社会主義社会では資本主義社会とは異なり、党の正しい方向の提示さえあれば、大衆は無条件的にそれに従うとし、金日成と党の主導の下でこの問題を強力に実行することを示した。ここでは、正しい言語の使用を奨励している点では一定の意義がみられるものの、その方法論としては国家主導的な観点

が強く、しかも一国の言語政策が国民の日常用語の変化からなる政策ではなく、一指導者の意思に左右されることを示している。

「第1次金日成教示」は、朝鮮語の教育問題についても言及し、大学を卒業した人であっても、言語の使用を間違っていることを見ると、教育機関における朝鮮語の教育上に大きな問題があると指摘した。したがって、全ての学校では朝鮮語教育については現状をより改善・強化し、全教育機関でも国語学習を制度化する必要性に迫られている。さらに、朝鮮語の辞典と語文学の教科書を改訂し、必要な参考書籍も刊行しなければならないとしている。

その上、語文学の教員を大勢養成しなければならず、また他の教科書も言葉と文字を整理する方向から再び検討して調整し直さなければならないと指摘した。ここで取り上げられている言語教育に関する金日成の指摘は正しい言語生活を奨励するという観点からすれば、概ね妥当であると考えられる。また言語教育の改善のための国語学習の制度化や辞典と教科書の改訂問題に関する言及も的を得ている議論であると思われる。だが「第1次金日成教示」では、そのような指摘を行うのみで、その実践面での具体性が欠けている議論となっている。

以上のように、「第1次金日成教示」では言語問題に関して10項目にわたって言及されている。この中でも漢字語問題、外来語問題、語彙の整理問題などが非常に具体的に言及されている。これは語彙問題を基本的かつ優先的な問題として扱っている自国中心的な言語観と社会主義的な言語観が反映されているからである。この他にも具体的な言及はなかったものの、文字改革、分ち書き、北朝鮮の標準語設定に関する問題が提起された。特に初めて言及されたものとして、韓国のソウルの言葉を標準にすべきではないという言説はその後の「文化語」の出現と結び付く点で注目に値する。

そして、漢字問題に関する項目では北朝鮮だけでなく、韓国と関連付けて考えなければならないと主張している。さらに、高等教育を受けた者でも朝鮮語の使い方に間違いがあると言及し、朝鮮語の教育上の問題点を指摘した。当時、北朝鮮では国語と関連して多くの時間が当てられていた朝鮮語教育にこのような問題点が指摘され、その教育に改善と強化が指示されたことから、当時の北朝鮮での漢字廃止策をとった以降の問題点も露呈したことが窺われる。

2. 「第2次金日成教示」の内容と分析

「第2次金日成教示」は、1966年5月14日に言語学者との談話の中で発表した「朝鮮語の民族的特性を正しく活かすことについて」を題目にして1968年『文化語学習』2号に収録されたものである。この教示の目的が以下のように冒頭に掲載されている。

「私は同志らに我が民族語をさらに発展させることについて少し話そうと思います。この問題に対してはこの前にも既に話したことがありましたが、もう一度強調しようと思います。⁽³⁾」

上記の文からは、金日成の朝鮮語に対する見解が始めて示された1964年の教示内容から補足を行う形で重要性の高いものとして補充・強調されたのが1966年の教示であることが窺われる。そこで本章では、「第2次金日成教示」についての、その原文の内容に沿ってテーマ別に整理し、それについての分析を試みる。⁽⁴⁾

(1) 漢字語および外来語の問題

「第1次金日成教示」では別々に取り扱っているが、「第2次金日成教示」で両者を同時に扱っている。それは、概ね以下のような内容となっている。

漢字語は、李朝の封建時代において中国に対する「事大主義」の結果として相当入ってきており、それによって朝鮮語に中国式の漢字語が氾濫するようになった、と主張している。例えば、《働く時間(일하는시간)》という言葉も《仕事期間(사업기간)》または《勤務時間(공작시간)》といい、《昼寝(낮잠)》を《午寝(오침)》というような中国式表現の典型的な実例として挙げている。またこのような漢字音の多くは、中国の広東地方で使われているものと類似していることを指摘した。

そして、日本帝国主義による植民地化の政策の一環として民族語の抹殺政策が行われ、その代わりに日本語の使用を強制された結果、日本式の漢字語と日本語が多く浸透したことを示した。それは、例えば、日本語や日本人が呼称したのも多く使われ、林檎の名前である《国光(국광)》、《旭(욱)》、《祝(축)》や稲の名前である《陸羽132号(육우 132호)》、《中生銀坊主(중생은방주)¹⁶⁾》、さらに《ウワギ(우와기)》、《オチャ(오차)》、《オボン(오봉)》などの多くの日常生活上の日本語と日本式漢字語が朝鮮語の中に浸透しているという指摘である。

1945年の民族解放後¹⁶⁾に、ロシア語が朝鮮語の中に入り込むような状況に置かれていたが、そのような状況からのロシア語の混入を金日成自身が食い止めたと述べている。しかし、現在朝鮮語の中にロシア語が相当混在しているのは事実である。北朝鮮において使用されている漢字語や外来語の問題は、韓国で使用されている漢字語や外来語に比べれば、余り大きな問題ではない。すなわちそこで問題となるのは、韓国で使っている言葉に存在するのであって、「南朝鮮新聞のようなものを見ると、英語や日本語を混ぜて使うことはいうまでもなく、漢字語は中国人も使

わないものまで無闇に使っています。実際に南朝鮮で使っている言葉の中で漢字語と日本語、英語を除くと、我々の言葉は《を(을)》、《を(를)》のような助詞⁽⁷⁾だけ残る状況です。」と述べている。

そして言語は、ある民族の重要な象徴を表しているものの一つであるにも拘わらず、韓国で使っている標準語は西洋語化、日本語化、漢字語化になってしまって、民族的特性が徐々になくなっていると主張し、韓国の標準語に対して辛辣に批判している。すなわち、真の愛国者は共産主義者であって、専ら共産主義者だけが自国の言葉を本当に愛し、発展させるために力を尽くしていると述べている。そして朝鮮半島では唯一共産主義者である北朝鮮のみが言語に対しての民族的特性が保持できる集団であると主張したのである。

そこには、「第1次金日成教示」の際には重要な問題であった漢字語や外来語の問題に関する言及よりも、韓国の標準語に対する批判に比重を置き、その批判に焦点を合わせているのが、「第2次金日成教示」の特徴である。今一つは金日成が言語問題をイデオロギー批判や政治体制の問題へとすり替えている点は、言語学的な視点からすれば、論点のすり替えとともに非論理的な問題提起となっている。

(2) 語彙の整理問題

「第1次金日成教示」では、語彙の整理問題について重要な問題としての認識を示し、漢字語の不要を唱えているものの、その具体性に欠けている。それに対して、「第2次金日成教示」での同問題は1964年の「第1次金日成教示」に比べれば、方向性と代案の提示がより具体的になっている。その基本方針は、漢字語と外来語を固有語に直し、朝鮮語を体系的に発展させて行かなければならない点で両者は変わりがないと思われる。その点についてさらに見てみると以下ようになる。

第一に、固有語と漢字語の意味が同様の際には固有語を使い、漢字語

を使わないようにし、辞典からもその漢字語は取り除くべきであるとした。例えば、《桑田(상전)》、《石橋(석교)》のような漢字語は棄て、《桑畑(뿌밭)》、《石の橋(돌다리)》という固有語を使うようにし、また、一般民衆の中で比較的によく使われている漢字語、《夏服(하복)》でも《夏の服(여름옷)》という固有語があるので、辞典からも取り除き、固有語を使うようにしなければならないと指摘した。しかし、辞典から取り除いた言葉の中でも民衆が引き続いて使うものがあれば、それはその時に再び辞典に戻せば良いと主張した。

第二に、方言については、方言でも良いものを発掘して使わなければならないとした。その例の一つとして、咸鏡道地方の方言である《汽車(기차)》をあらわす《火の車(불술기)》を挙げた後に、朝鮮語の方言を詳細に調査してみると、今でも使える良い言葉があるとし、固有語の使用を積極的に進めている。そのような結果は、後の「文化語運動」とも密接に関わることになる。

第三に、地名に関しては、固有語を積極的に発掘して故郷の名前も固有語で呼ぶことが、漢字語で呼ぶのと比較して見れば、より上品に聞こえると述べている。例えば、《赤岩(적암)》は《赤い岩(붉은바위)》に、《石橋村(석교동)》は《石の橋の村(돌다리골)》に直して、固有語で呼ぶことを推奨している。そしてそのような事業は、既に社会科学院が地名の調査を実施している。この調査活動が社会科学院の力量だけで手に負えないのであれば、内閣でこの事業を保障するための決定や命令を下したほうが良いと記されている。

第四に、既存の固有語を探し出して使うだけでなく、新しい言葉は固有語でつくり出して使わなければならないと主張した。日本式の漢字語は無条件的に直すべきである。また人の名前やこれから付ける子どもの名前はできるだけ固有語で付けた方が良いとも述べている。そしてまた、他の国との科学・文化交流を通して新たに入ってくる外来語は、導入の

ときに自国の言葉に直せば良いと主張した。その一例として、ソ連から北朝鮮に入ってきた種豚である《ヨークシャ種 (대백종)》と《シベリア北部種 (씨미리북부종)》が《中華在来種 (중화재래종)》と交雑して新しい種豚をつくった時に、それを《平壤種 (평양종)》と命名したことを取り上げている。

第五に、学術用語はあまり砕いて書かない方が良いとし、新しく生成される言葉に対しては国語査定委員会がそれを検討し、調整すべきであると主張した。そして、多くの漢字語の中で人々に確固として認識され、朝鮮語に完全に固まってしまったものはそのままにしておいた方が良いと述べている。例えば、《学校 (학교)》、《部屋 (방)》のような言葉は漢字語として見なくても良いとし、それらの言葉は直さなくてもいいとした。また、《法則 (법칙)》、《坑道 (갱도)》という言葉も直して使う妥当な言葉がないため、直す必要がないと述べた。

そして、漢字語と固有語の意味が同じでも、意味合いの幅が必ずしも同じではないものは、漢字語と固有語をそのまま残しておくしかないと述べている。《地下 (지하)》と《土の中 (땅속)》、《心臓 (심장)》と《念桶 (염통¹⁸⁾)》を例に挙げて、《地下闘争 (지하투쟁)》という言葉が《土の中の闘争 (땅속투쟁)》と直すことや、《平壤は私の心臓 (평양은 나의 심장)》という言葉が《平壤は私の念桶 (평양은 나의 염통)》と直すことはできないと述べている。さらに固有語と漢字語が同様な意味合いであるとしても使用事例によって残すことが北朝鮮の言語生活に混乱を招かないと主張している。

さらに、漢字語の語彙との結合関係も考慮する必要があり、《日気 (일기)》と《天気 (날씨)》を例に挙げ、《予報 (예보)》と結合する際には《日気予報 (일기예보)》が妥当であるために漢字語の《日気 (일기)》は残すべきであると指摘した。そして語彙の整理問題では、漢字語や外来語の問題を中心にして考えられており、その具体的な事例は1964年

の教示と同様のものに加えて、より多くの事例が挙げられている。

(3) 語彙の整理運動の方法

金日成は、朝鮮語の語彙を整え、磨き上げるための幾つかの具体的な方法を提示した。まず、磨き上げた語彙を中央新聞や地方新聞に発表・掲載し、紙上討論を通してこれに対する人民大衆の様々な評価や意見を集約し、人民大衆の知恵を集めなければならないと述べた。この事業は、人民全体の日常的な言語生活と関連しているので、主観的な欲望だけをもち、キャンペーン的にすることは絶対にしてはいけないと主張し、漢字語や外来語を一つ一つ作り直していくような殲滅戦の方法で漸次的に作り直して行く方法を提示した。

その具体的な方法としてはまず、日常的に使う単語から整える必要があると主張している。普通教育部門の学校で使う単語が5000～6000個ぐらいあるといわれている。まずはそれらを整理・普及させてから、その次に普及させたい単語を先に直しておいてから、前の単語が全部普及された後に、次の単語を出していかなければならないと指摘した。

第二に、軍事用語の整理時期についても言及し、その用語を今すぐに直すことは時期尚早であるため、今後の状況を考慮し、改定させなければならないとし、それを直すときにも辞典には載せずに別途に、直すべきであると指摘した。そして大衆が磨き上げた固有語を上手く使用できるようにするために、7000～8000個程度が掲載された単語本の制作を指示した。学術用語に関しては国家機関である内閣と省などで学術用語集の草案を作成し、各下部機関へ配付した後にその下部機関ではこの用語を5～6年または10年程度使用しながら、より良い語彙に磨き上げていくべきであると主張した。

以上のように漢字語と外来語問題に関係している語彙の整理問題を語彙の「整理運動」の一環として考えており、その具体的な対案が示され

ている。そして、その対案は1964年の教示よりさらに詳細かつ具体的な方向へ補完・強化されており、1966年の教示の中で最も比重の高い部分となっている。

(4) 文化語の成立

金日成は、朝鮮語を発展させるために、基礎を上手く固めておかなければならないと主張し、北朝鮮にその革命の参謀部があり、政治・経済・文化・軍事の全ての方面に渡る革命の戦略・戦術を立てることができる平壤を、革命の首都であり、揺籃地であると規定した。そして朝鮮語の民族的特性を保存・発展させるという名目下に平壤の言葉を基準にした新しい標準語を誕生させたのである。そこで標準語といえ、韓国ソウルの言葉を基準にしているかのような誤った理解をしているが、社会主義を建設している北朝鮮の革命の首都である平壤の言葉こそその基準になるべきである。その際に、平壤の言葉こそが言語を発展させていく標準語となっていくべきであると主張し、標準語という用語の代わりに「文化語」という新しい用語の使用を表明したのであった。

上記のように、1966年の教示では「文化語の誕生」が示されている。その「文化語」に対する具体的な記述は「第1次金日成教示」の中には出てこない内容である。その点でいえば、言語政策の具体的な事実の顕在化という点で注目に値する。一方、北朝鮮の言語の中心を平壤の言葉〔標準語＝文化語〕におく方針は、1972年に改定した北朝鮮の新憲法149条で「北朝鮮の首都をソウルから平壤にする」という規定より6年も前に言語的な面から既に実現されていることになる。特にこの「文化語の誕生」こそが、現在における南北両国の言語上における異質化の現象を深化させる決定的な主因として作用して行く。

(5) 文化語と固有語の普及のための早期教育

「第2次金日成教示」では、文化語と固有語が人民大衆の中に速やかに入っていくようにするためには、それを教育部門から実行すること、そして特に初等学校から先に受け入れるようにし、新聞と放送でも使用するようにしなければならないと主張した。これを上手く普及するために学校から開始し、まず人民学校1年生から新しく整えた語彙を学ばせ、子どもたちが、大人たちの間違った言葉を直してあげるようにしなければならないと主張した。例えば、漢字語に慣れているお年寄りが《午寝(오침)》といえ、その時に子どもたちが《昼寝(낮잠)》という言葉に直すことを取り上げ、古いものを棄てて新しいものを受け入れる方法として文化語や固有語を蘇らせなければならないと主張した。

そして、文化語と固有語の普及と教育をさらに発展させるため、言語学者をもっと養成することを提案している。そして師範大学と教員大学でも履修課程の中に朝鮮語の時間を多く設定すべきであると主張した。そこには、正に言語上の教育・普及の問題を政治問題の一環として捉える一方で、その解決方法としては子供たちをも「文化語運動」に動員するという形で行っていることが示されている。

(6) 主体的な言語思想

言語学でも「事大主義」の影響から抜け出し、主体を確立して朝鮮語を体系的に発展させ、人々がそれを使用することで民族的自負心と矜持を持つようにすべきであると主張している。全世界が全て共産主義になるまでは、人々が民族別に分かれて暮らすことは当たり前である。言うまでもなく朝鮮人は朝鮮の地で暮らすことになるから、全世界が共産化する前までは朝鮮語を引き続き使用することになると述べた。したがって、それを使う我々が朝鮮語を十分に活かして発展させることこそが、後代の人々に立派な朝鮮語を残し、その確固たる言語的な土台を残して

おくことができることを強調した。そこでの議論で出てくる言語学上における「事大主義」云々の行は、その定義がほとんど示されずに唐突に現われる一方で、「主体的な言語思想」などの抽象的な言葉でもって説明されている点で、全く不明確な概念である。

(7) 古典翻訳

古典の翻訳は、漢字語式に翻訳すべきではないとし、古小説や伝説集、史話集なども現代の人々が分るように現代化して固有語で翻訳しなければならないと主張した。このような古書の翻訳のために漢文の知識がある人が望ましいとしている。そして今後、金大（金日成大学）に古典文学科を別に設け、賢い人を何十人か受け入れて漢文だけではなく、文学も教授し、この事業を遂行した方が良いと述べている。さらに彼らの学習期間は4年が短いのであれば、6年にしても良いと強調した。

そこでの議論は、言語学的な視点で言えば、言語学者を育てるという構想とその育成の結果物として難解な古典文学の一般国民向けの平易な現代語化を図る、という点で評価できる部分も存在する。だが、政治指導者による学科名までの指示は、言語学への顕著かつ過度なまでの国家介入の実情を露呈している。

(8) 漢字教育

「第2次金日成教示」では、漢字ならびに漢字語は必要とする漢字以外は使わないようにと述べている。しかし、韓国の出版物と古文書に漢字が少なからず使用されているため、学生に対してある程度は漢字を教えなければならないと主張している。さらに学生に漢字を教えるという大義名分があるとしても、どんな形式であろうとも教科書にその漢字を入れてはいけなくとしている。すなわち、学生への漢字教育はあくまでも便宜上のものであって、実質上の漢字教育へと表面化することは禁ず

ると堅く念を押した。

以上のように、北朝鮮では1949年の漢字の全面廃止を打ち出した以降、1964年の金日成教示に引き続き、この1966年の金日成教示でも再び表明し、北朝鮮の言語政策⁽⁹⁾の重要な一部分を示したことになる。

(9) 文字改革

朝鮮語の文字は四角い文字であるため、筆記が少々不便であり、主に音を標準にしているため、発音をする際は問題がないものの、単語の形態でできた文字とは異なるために、文字が見難く、文字の印刷における機械化にも不利であると主張している。文字を見易くするためには、単語を形態化して一目に見えるようにしなければならないと述べた。勿論、漢字にも欠陥があるが、一文字ずつにその意味を持っているため、見易いという利点があると主張した。だが、朝鮮語の文字を漢字のように変更しようとしている訳ではなく、文字を横書きにした例である『周時遺稿集(주시경유고집)』を見ると、それをもっと改善して洗練させた文字にしてみることも良いと述べた。

その一方で金日成は、金科奉一派が提起した文字改革に反対した以降、特にそれに代わる対案が示されてもいないとも述べている。さらに金日成は、ただ北朝鮮で文字改革が行われれば、韓国との民族的な分裂と科学・文化発展の障害になるために、今の時期に改革を行うことは適期ではないと反対した。つまり、祖国の統一が来る前までに、文字改革についての準備と研究をして置き、南北統一が実現された後に文字政策を完成させるべきであると主張した。

そこには、朝鮮語の筆記が不便であると主張するのみであって、筆記の際に何がどう不便なのかについての具体性に欠けている不明瞭な議論となっている。金日成はここでも言語問題を政治問題(南北統一)と絡ませている傾向がみられる。そのために、南北の両側が政治問題とは別

に言語問題だけを共同研究の対象として進めるといった、政治と言語問題を分離させたような問題提起はなされずに終わっている。

(10) 分かち書きの問題

朝鮮語の四角い文字は、横書きより縦書きのほうが見易く、読み易い文字であるが、これを上手く研究すれば、横書きでも大きな支障なく、読むことができる」と述べている。そのために分かち書きを上手く規定しておくことで読み易くなり、読書力の向上にもつながると主張した。そして現在のような分かち書きの方法から文字をくっつけて書く方向へ改訂しなければならないと主張している。

それは例えば、《社会主義建設 (사회주의건설)》という単語を書く際に、《社会主義建設 (사회주의건설)》とくっつけて書くべきであって、《社会主義 建設 (사회주의 건설)》という形で分かち書きをすれば、読書の能率が上がらないと主張した。つまり、我々が朝鮮語を速く読み、理解し易くするために分かち書きについて明確に規定する必要がある、分かち書きは新たに決めようとしている規定が現在使っているものよりも比較的優れていると主張した。

以上の議論では、金日成の個人的な好みの問題が鮮明に出ている点で特徴的である。それは例えば、読み易さの問題然り、横書きの問題然りである。また分かち書きに関する規定を明確にして置くのは良いとしても、それがなぜ読む速さと結び付くのか、不明である。つまり、なぜ朝鮮語を早く読む必要があるのかが不明確なのである。

(11) 『朝鮮語 (マル) 規範集』

「第2次金日成教示」では、北朝鮮の国語学者によって作成された『朝鮮語規範集 (조선말규범집)』に関しては、草案のまま作成し発表したほうが良いと述べられている。そして朝鮮語の子母音の数を24字にし

ようとする意見と40字にしようとする意見があるが、文字改革を行う前までは現行通りの40字で使用する方が良いと示した。

後に金日成教示によって制定された、この『朝鮮語(マル)規範集(조선말규범집)』は、内閣の直属機関である国語査定委員会から公布されたものである。これは政策当局が言語規範を強力に施行しようとする意思があらわれたものとして考えられ、その後の北朝鮮の言語改革において大きな影響を及ぼしたと推測できる。

おわりに

本稿では、北朝鮮における言語政策の一環として、1964年と1966年の二度にわたって金日成自らが発表している「第1次金日成教示」と「第2次金日成教示」に関する実証的な分析を行った結果中で、以下のような知見が得られている。

まず、上述のような二回の教示は言語政策の一環として出されているものであるにも拘らず、その中には幾分政治的色彩を帯びている点を明らかにしている。特に金日成は、北朝鮮の最高指導者である政治的な立場を十分に利用して、彼自身の個人的な趣向や見解をも、当の言語学者や人民に押しつけている傾向が強く見られる。一部彼の主義・主張が的を得ている部分は存在するものの、上(国)から一方的に言語政策を人民に押し付けるのは、言語における政策的な側面が損なわれる可能性をも示し、その結果として国民の言語生活への政治介入を強いられる状況を生起しているのも事実である。

さらに本稿では、一国の言語政策と、それに対する政治的介入が引き起こしている問題を明らかにしている。すなわち、金日成は北朝鮮における言語政策を語る際に、常に政治問題である南北統一と絡ませて説明

する傾向が見られる。確かに言語政策を展開する上で一定の政治的介入は避けられない部分は存在するとしても、全面的な政治介入は言語学者の役割を軽視する結果となっている。そして言語政策でもって体制の優位性を強調するところは言語政策の視点から見れば、言語政策を政治の道具として利用する的外れの政策であることを示している。

以上を踏まえて、二度にわたる金日成の教示を一言で要約するとすれば、平壤の言葉を、いわゆる文化語、すなわち「標準語」にし、金日成自身の革命的な要求に合致する強力な武器として位置づける一方で、それを展開させるための「主体の言語理論」を再表明するためのものであったと言える。したがって、南北両側における言語使用の面で見れば、片一方の国の言語政策を考慮せずに、独自の方向へ進んでいくことによって、南北の言語の異質化の現象をもたらすとともに、その深化へと押し進める結果を招いている。

北朝鮮の政府機関である国立国語研究所は、北朝鮮の言語政策を「金日成中心の言語政策」、「体制反映の言語政策」、「民族語発展の言語政策」として評価しているが、北朝鮮の言語政策の中で著しく方向転換が現れてくる原因となるのは、やはり一国の指導者による言語に関する基本方針の表明からであった。これは言語の自然発生的な言語規範ではなく、ある特定の政治目的意識が含まれている人為的につくられた言語規範の導入をあらわし、また政治の道具（武器）としての言語観が導入されたことを示している。正にこれが金日成による1964年と1966年の二つの教示である。さらに上述のような二つの教示は彼の主体的な言語理論が明文化された教示であるとともに、北朝鮮の言語観を画一化させるための教示でもある。

金日成の二つの教示内容を簡単にまとめると、①文字改革問題②漢字語問題③外来語問題④漢字問題⑤単語形態の表示問題⑥語彙の整理問題⑦言語生活問題⑧朝鮮語の教育問題などである。これらは北朝鮮の言語

生活について広範囲な項目に関して言及されたものであって、北朝鮮の主體的な言語理論とそれが言語政策へと発展していく道標となって行く。最後に、金日成の教示を引き継ぐ形で行われる金正日による談話に対する分析については今後の課題として残っている点を確認して置く。

註

- (1) 拙稿「韓国における文字政策—漢字教育の変遷について—」『語研紀要』第32巻第1号、愛知学院大学、2007、pp. 173-201.
 「北朝鮮における文字政策—漢字廃止と漢字教育の現状—」『語研紀要』第33巻第1号、愛知学院大学、2008、pp. 113-138.
- (2) 拙稿「韓国と北朝鮮における言語規範の比較—「分かち書き」を中心に—」『語研紀要』第30巻第1号、愛知学院大学、2005、pp. 227-245.
- (3) 北朝鮮での「教示」の意味は、①革命の偉大な金日成同志が教えた革命と建設で指針となる「お言葉」を尊敬して表す言葉。我々の全ての党員と勤労者は革命の偉大な首領である金日成同志の教示とそれを具現する党の政策を深く研究し、それを自分の骨と血にし、党の唯一思想、金日成同志の偉大な革命思想として強健に武装しなければならない。②「労働階級の偉大な首領の教え」を高めて言う言葉。(1978『朝鮮文化語辞典』)
- (4) 김민수 편저 『김정일 시대의 북한언어』 태학사、1997、pp. 42-43.
- (5) 김민수 『북한의 국어연구』 일조각、1993、pp. 76-95.
- (6) 고영근 「남북한 언어 이질화현상과 그 극복 방안(1)」『주시경학보』、1988、pp. 63-81.
- (7) 남성우・정재영 『북한의 언어생활』 고려원、1990、pp. 14-15.
- (8) この「文化語運動」については以下の拙稿を参照されたい。
 「北朝鮮における言語政策—「文化語」を手掛かりに—」『語研紀要』第34巻第1号、愛知学院大学、2009、pp. 101-103.
- (9) 1964年1月3日の「第1次金日成教示」と1966年5月14日の「第2次金日成教示」の全訳文に関しては既に発表済みの拙稿を参照されたい。
 拙稿、「北朝鮮における言語政策—「第1次金日成教示」の全文翻訳—」『語研紀要』第35巻第1号、愛知学院大学、2010、pp. 174-197.
 拙稿「北朝鮮における言語政策—「第2次金日成教示」の全文翻訳—」、『語研紀要』第36巻第1号、愛知学院大学、2011、pp. 194-226.

- (10) 남성우·정재영, 前掲書, pp. 254-262.
- (11)金科奉(1988年~1961年)独立運動家、ハングル学者、朝鮮民主主義人民共和国の政治家。周時経の門下生として3.1独立運動以降、中国へ亡命し、独立運動をした後、1945年に入北し、北朝鮮で政治と言語学で主導的な役割を担ってきた。文字改革論とハングルの横書きを主張した。1958年延安派事件によって粛清された。
- (12) 남성우·정재영 『북한의 언어생활』 고려원, 1990, pp. 254-255.
- (13) 拙稿「北朝鮮における言語政策—「第2次金日成教示」の全文翻訳—」、p. 194.
- (14) 남성우·정재영, 前掲書, pp. 262-269.
- (15) 1907年、石黒岩次郎が富山で育成した稲の品種。
- (16) 1945年8月15日の終戦のこと、植民地時代からの解放を意味する。
- (17) 拙稿「北朝鮮における言語政策—「第2次金日成教示」の全文翻訳—」、p. 196.
- (18) この言葉は朝鮮固有語で語源は定かではないが、「考えや思いなどを入れる器」という意味としての「念桶」であるとの説がある。
- (19) 拙稿、「北朝鮮における文字政策—漢字廃止と漢字教育の現状—」、pp. 113-138.

参考文献

- 김일성 「조선어를 발전시키기 위한 몇가지 문제」 『문화어학습』 1968・2 (金敏洙、1985、재수록)
- 김민수편저 『김정일 시대의 북한언어』 태학사, 1997
- 남성우·정재영 『북한의 언어생활』 고려원, 1990
- 金敏洙 『北韓의 國語研究』 高麗大學出版部, 1985
- 『북한의 조선어학사』 녹진, 1991
- 고영근 「남북한 언어 이질화현상과 그 극복 방안 (1)」 『주시경학보』 1988
- 文嬭眞 「韓國と北朝鮮における言語規範の比較—「分かち書き」を中心に—」 『語研紀要』 第30卷、愛知学院大学, 2005
- 「韓國における文字政策」 『語研紀要』 第32卷、愛知学院大学, 2007
- 「北朝鮮における文字政策」 『語研紀要』 第33卷、愛知学院大学, 2008
- 「北朝鮮における言語政策」 『語研紀要』 第34卷、愛知学院大学, 2009
- 「北朝鮮における言語政策—「第1次金日成教示」の全文翻訳—」 『語

研紀要』第35卷、愛知学院大学、2010

「北朝鮮における言語政策—「第2次金日成教示」の全文翻訳—」『語

研紀要』第36卷、愛知学院大学、2011

大阪外国語大学朝鮮語研究室編『朝鮮語大辞典』上・下、角川書店、1986

한글학회 『우리말큰사전』 어문각、1992